

**Center for the
Multicultural
Public
Sphere**

Working Paper 2023 No. 4-1

10月14日 16:00~17:30
多文化公共圏実践演習 (グローバル)
多文化公共圏フォーラム 第6回

尾形祐美

チェコと日本で季節感について
俳句を通して気づくこと



季節感—チェコと日本の俳句を通して

2022年10月14日尾形祐美

季節感について考える

- 私自身、自然を身近に感じる山裾の町で育ったため、四季の移ろいには敏感であると思っていた
- 成人後、日本の暦を意識し始め、より細かい季節の感覚を知る
- 俳句を始めてから、さらに、季節のものを先取って意識して観察する、あるいは発見する、という面白さを知る
- ハワイやチェコでの句会や日常生活を通し、季節感について日々考えている

ハワイ在住日系人の句会の季節感



- ・縁あって「マウイホトトギス」に2018年年末頃からオンライン参加。
- ・主な参加者は俳句を何十年も読み、作り続けているホトトギス派の方々。
- ・ハワイには日系人が多いためか、ハワイ独自の歳時記が発行されている。



・季語を重んじる”ホトトギス”の会、ということも”日本の季節感”に寄せようという意識の理由のひとつかもしれない。

・毎月の兼題は日本の歳時記と、ハワイ歳時記からの多様な兼題

例：2021年9月は「月」ハワイからは「島の秋」「新コーヒー」

・ハワイは緯度も日本と全く異なるため、季節の移り変わりや速さは全く違う

・毎月のハワイ兼題や、ハワイ在住の方の俳句を読むと、ハワイと日本の”季節のもの”（季節感を感じるもの）の違いを感じることはある。それでも日本人が日本で作る俳句とそこまで大きく変わらないことに驚く。

・日本で育った、あるいは日本に住んだことのある日系人の参加者が主なため、日々の”ハワイの季節感”を捉えつつも、過去の体感で知っている”日本の季節感”に寄せようという意識が感じられる。

チェコでのチェコ人との句会の季節感



- ・2018年8月からチェコでチェコ人の句会を始める
- ・参加者は主に日本に行ったことがない、日本のこともあまり知らない、文学や詩に関心のある様々な職業、年齢のチェコ人
- ・日本からも、これまで俳句を作ってきたわけではない、友人や身内が参加（私がチェコ語に翻訳）
- ・チェコの歳時記はない。チェコで独自に句作をし出版しているチェコ人の俳人の中には、“季節”ではなく、“月ごと”の句として区切っている人もいる。

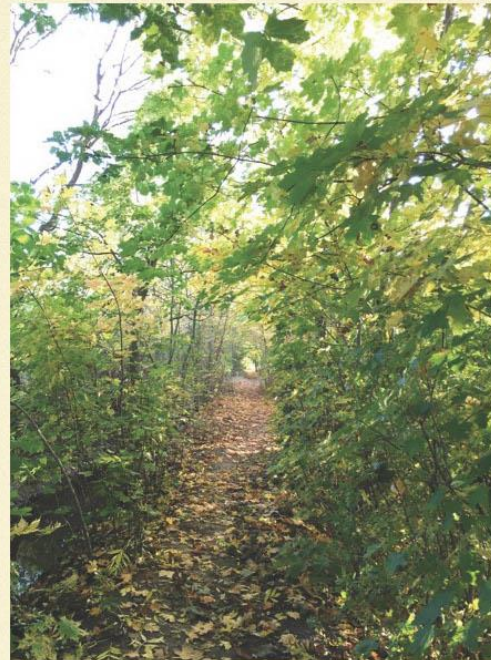
・チェコと日本は緯度が近いので、(チェコは日本の北海道あたり)
季節の移り変わりの時期、速さは似通っている

・歴史的、伝統的にキリスト教文化圏なので、暦はキリスト教の影響が色濃いものが現在まで使われている。
聖誕祭、復活祭をはじめ、聖人による祝日など。毎日聖人の名前が付けられており、“名前の日”として誕生日と同じように祝う、など。
(1989年までの社会主義時代に、宗教の弾圧があったため、現在はキリスト教は人口の14%と少ない。)

・キリスト教以前の民俗的な季節ごとの祝日、習慣も残っており、季節を感じさせる。

・日本の歳時記を中心とした文化(短歌、花道、茶道、俳句のような季節に密着したもの)はないので、“季節を感じよう”という態度やそのための材料は日本に比べると少なく感じられる。

・このような前提のもと、チェコ人の句会PUPALKAでさまざまな季語での句会を試みてみた。



日本とチェコで季節感を共有しやすい季語

木の芽 このめ pupen

春の木の芽を総括して言うもので、木の種類や土地によって早い遅いはあるが、いっせいに芽吹いて、枝を赤らめたり青く色どったりしている木の芽は、いかにも春の到来という実感をそそり、力強く若々しい気分を満喫させる。

本意：生気みち、潑刺と春の到来を具体化する季題。

(平井照敏編、新歳時記・春、軽装版2021.9、河出書房新社)



ひた急ぐ犬に会ひけり木の芽道

中村草田男

考え事してる内出た木の芽哉

ZAMYSLEL JSEM SE
A ZMEŠKAL JSEM
PŘÍCHOD PUPENŮ

2022年4月PUPALKA

葡萄 vino

秋になると葡萄の房が垂れさがり、だんだん色づいてゆく。種類によって、緑色のまま透明になってくるものや、さまざまな段階の紫に色づくものや、いろいろである。

本意：古くは、おおえびかつら、えびかつらといい、野生の葡萄をさしたもの。中世から江戸時代にかけてやっと葡萄の名で呼ばれる品種が出はじめる。～しかし西洋ほどの需要はなく、今日のイメージになるには明治以降の、西洋の品種が入ってくる必要であった。今は秋の味覚の代表の一つである。

(平井照敏 編、新歳時記・秋、2015,2 河出書房新社)

チェコでは夏の終わり頃から、庭先で葡萄が熟れ始め、市場にも出回る。「葡萄」と「ワイン」の単語が同一である。新作ワインや、新作ワインの試飲会を兼ねたパーティーやイベントが「秋の葡萄」のイメージを強めている。



ヴォドニャニ町のワインダンスパーティーの会場

黒きまで紫深し葡萄かな

正岡子規

葡萄畑腕に抱える夏の日々

STARÝ VINOHRAD
STŘEŽÍ NÁRUČÍ
VZPOMÍNKY LÉTA

2018年10月PUPALKA

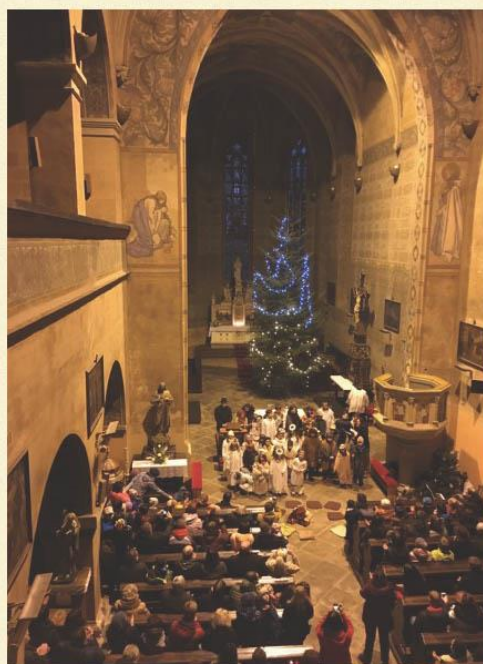
蜜柑

mandarinka

ミカン科の常緑低木の実。～暖地に
広く栽培される。
炬燵の団欒風景を思わせる日本の代
表的な果物のひとつ。

(合本 俳句歳時記 第四版、角川学芸出版)

比較的寒冷地であるチェコには蜜柑は
生えないが、クリスマスに、イエスキリ
ストの生誕の際に遠方からの使者が持っ
てきた果物の象徴として、蜜柑やオレン
ジ、パイナップルなどを飾ることから、
クリスマス以降1月頃まで、蜜柑を食
べたり人に贈ったりする習慣がある。



蜜柑の木香高まる青い空

尾形和則 2020年12月PUPALKA

冷えた家乾く置き去りの蜜柑哉

V CHLADNÉM DOMĚ
USYCHÁ OPUŠTĚNÁ
MANDARINKA

2020年12月PUPALKA



日本の歳時記特有の季語

春の夢 jarní sen

春眠の中で見る夢のこと。ただ、昔から、人の世のはかなさを、「春の夜の夢」とか、「一場の春夢」とかいうので、そうしたニュアンスもひびくが、春の眠りの中でのとりとめのない、時にはあやしい、艶なる夢のことである。

本意：春の快い眠りの中での夢の様々なさまざまな情感をさしている。非現実的な夢も多い。

(平井照敏編、新歳時記・春、軽装版2021.9,河出書房新社)

2020年4月PUPALKA

句会の際には上記の説明、本意は伝えずに俳句を作ってもらった。



降る光の中を歩く春の夢

PADÁ PADÁ
SVĚTLO
KRÁČÍ JARNÍ SEN

2020年4月PUPALKA

草の上とけ込むわたしも春の夢

SEDÍM V TRÁVĚ
JSEM TICHOU SOUČÁSTÍ
JARNÍHO SNU

2020年4月PUPALKA

夏めく pocit léta

新緑、若葉の美しい頃である。春の花がおわり、夏の花、花菖蒲、あじさい、くちなしなどが咲く。活気ある夏のはじまりである。

<本意>四季のことばに「めく」をつける言い方であるが、夏めくも、夏のはじめの頃の、夏らしくなった様子をさす。夏の色、夏景色などともいう。

「夏浅し」もこれに近い。

(平井照敏編、新歳時記・夏、軽装版2021.9、河出書房新社)

2021年5月PUPALKA

上記の歳時記からの引用をチェコ語に訳し、幾つか例句も紹介してから俳句を作る、という方法を試してみた。ちなみに、一般的なチェコ人の認識では5月はまだまだ春。



長い髪裸の肩に夏兆す

DLOUHÉ VLASY
NA NAHÝCH RAMENOU
LÉTO ZAČÍNÁ

2021年5月PUPALKA

レストラン庭の席開き夏兆す

ZAHRÁDKA RESTAURACE
OTEVŘENÁ
PRVNÍ POCIT LÉTA

2021年5月PUPALKA

風薫る vítr voní

青嵐は視覚を中心においている風だが、これは嗅覚に焦点をおいている。青葉、青草を吹く風がその香りをはこんでくると感じている。やはり南の風である。

<本意>南の風の気 持ちよさをあらわす季語。(平井照敏編、新歳時記・夏、軽装版2021.9、河出書房新社)

PUPALKA1年目の2019年5月、上記の説明や本意を伝えずに「風薫る」という言葉から連想させた俳句を作った。

2021年6月に再度、説明、本意、例句を読んでからの句会を試みた。



空っぽの道に木の香りいずこから

PRÁZDNOU ULICÍ
LETÍ VŮNĚ STROMŮ
ODKUDSI

2019年5月PUPALKA

カーテンが風に踊れば胡瓜の香

ZÁCLONA TANČÍ
VE VĚTRU CO VONÍ
PO OKURKÁCH

2021年6月PUPALKA

夏の風薫り運びし君もうここに

LETNÍ VÍTR
NESE TVOU VŮNI
UŽ JSI TADY

2021年6月PUPALKA

朝寒 ranní chlad

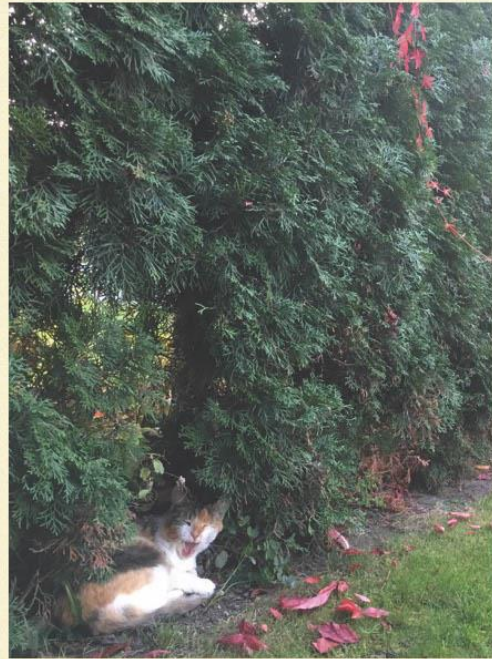
秋のおわり頃には、一日の最低気温が朝になり、それが涼しの段階をこえてさがるので、朝寒ということになる。曇っている日より晴れ上がった日の方が多いが、日のあたる場所にひとりでも出て行ってしまおう。

本意：～晩秋の紅葉をつくりだすつめたさである。朝の一時的な寒さだが、冬の近きをしらせる。

(平井照敏 編、新歳時記・秋、2015.2 河出書房新社)

2021年10月、上記の説明、本意、幾つかの例句を訳したものを共有した後に句会を行った。

朝寒のイメージに呼応して、自然と同じ秋の季語である「夜寒」の俳句も雑詠でできた。



人混みに人から隠れて朝寒や

PŘED LIDMI
SCHOVÁM SE DO DAVU
V RANNÍM CHLADU

2021年10月PUPALKA

夜寒には言葉も凍る舌の先

CHLADNÝ VEČER
SLOVO PŘIMRZLO
K JAZYKU

2021年10月PUPALKA

・「日本とチェコで季節感を共有しやすい季語」は意外にたくさんある。季節の植物など、具体的な“物”であることが多い。実際に兼題として句会をすると、季節感を共有していても、その対象物に対する印象や気分には文化的違いが感じられる。

・「日本の歳時記特有の季語」では、句会で試してみた季語は、名詞が形容詞や動詞と組み合わさった言葉であることが多かった。そのため、詩的感覚をまとっているからか、歳時記での説明、本意を解説してもしなくても、その言葉が使われてきた“日本人の季節感”に近い物を感じられる俳句が多く作られた。

・「風薫る」は、「薫り」の方に注意がいき、結果、初夏に感じるさまざまな「薫り」の句が出てきた。本意や例句を説明した後も同じような結果となったのが面白い。



チェコの季節感と、
日本の歳時記によって新しくもたらされる感覚

- 「季節感」は、どこの気候か、という地理的な要素だけでできているわけではなく、「誰が感じ、どのような文化的背景から観察しているか」が大きな要素となってできている、ということを実感する。
- 遠いハワイとの俳句のやりとりで、「季節感」を共有することもある。過去にもっていた感覚を懐古的に思い出す、という感覚に近い。それはハワイに住む日本人が、日本の文化的背景から観察しているから、私も自身の日本人としての季節の感覚を思い起こす。
- チェコで育ったチェコ人と、日本人である私のチェコでの生活で観察する「季節感」は少しだけ違う、ということも感じる。
- チェコでの句会で私が他の参加者達と共感する「季節感」は、現在の時点での感覚であることが多い。
- 句会の初めから、日本歳時記に沿って、春を2月から4月、夏を5月から7月、秋を8月から10月、冬を11月から1月、として兼題を選んできた。参加者に抵抗はあったが、4年目が終わる頃になると、「季節を先取りして、観察する」という感覚が、四季の自然の営みにじっくりくる、という声も出てきたので、このまま続ける予定である。

オンライン国際交流 2022／チェコ共和国

松井貴子「多文化公共圏実践演習(グローバル)」

多文化公共圏フォーラム第6回

尾形祐美「南チェコでことばについて考える」講義資料

「チェコと日本で季節感について俳句を通して気づくこと」

編集 松井貴子／宇都宮大学国際学部日本文化論研究室

発行 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

2023年11月30日発行